

内外教育

2019年(令和元年)10月8日(火) 第6780号
(購読料金 税抜月額4,000円)

●昭和21年12月12日 第3種郵便物認可 ●毎週2回火・金曜日発行
(但し祝日等を除く) ●発行所 〒104-8178 東京都中央区銀座
5丁目15番8号 時事通信社 ©時事通信社2019
誌面内容に関するお問い合わせ(編集部) educate@grp.jiji.co.jp
ご購読に関するお問い合わせ(業務管理部) dokusya@jiji.co.jp

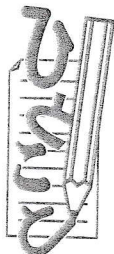
時事通信社

目次

〈教育長はこう考える〉
中田好昭奈良県生駒市教育長に聞く
英語もフォントも先を見据えて……………2~3
発達障害、本人の思いを中心に
文科省「超福祉の学校」でシンポジウム ……4~5
〈調査1〉高2の3割、校外で勉強せず
希望進路で差—文科・厚労省調査……………6~7
〈調査2〉ネットリスクの指導が必要
総合警備保障(ALSOK)の小学校教員意識調査
……………8~9
いじめ・指導自殺、11月も要注意
「ここから未来」シンポジウムで指摘 ……10~11
導入の意義を論議
国際バカロレア推進シンポジウム……………12~13
〈特集2〉第34回「教育奨励賞」受賞校
▽優良賞
主体性育成し、子ども食堂を実現
③大阪府立松原高等学校……………14~15
▽努力賞
生徒を育てる交流とボランティア
①東京都日野市立三沢中学校……………16~17
〈評の評〉一般誌9月……………18~19
〈調査3〉英語の指導に自信ありは約3割のみ
イーオンの「小学校英語教育に関する教員意識
調査」……………20
〈良書発掘〉……………21
〈アンテナ・スポット〉……………22~23
〈ラウンジ〉大臣がやるべきこと……………24

現代学生考

敬愛大学客員教授 ● 武内 清



これまで幾つかの大学で学生に接してきた経験から、大学と大学生に関して考えてみたい。自分の場合は、受験勉強を終え大学に入学して受けた授業はさっぱり心に響いてこなかった。それで大学外に知の源泉を求めた(読書等)。

1970年代後半に大学教師になり学生に接してみると、講義への出席率は3割程度と低く、大学生活の中心は友人関係とサークル活動であった(スキー、テニス、マージャンは定番)。学生たちは厳しかった受験競争の疲れを4年間のモラトリアムの期間に取り、企業戦士として社会に出た。企業も受験学力は評価したが、大学教育

には何の期待もしていなかった。

90年代以降になると、大学の授業改革が進み「大学の学校化、学生の生徒化」が進行して、学生たちは素直になり、授業への出席率は急速に高まった。学生たちは授業から何かを学ぼうと考えたのである。情報化社会になり情報量が膨大となり学問が高度化している、どの分野でも基礎的な部分は学ぶ必要が生じた。それで知識は大学の授業から得るもので、大学外から学ぶという意識は薄れていった(読書の習慣がなくなった)。「キャンパスの生態誌」(潮木守一著、中公新書、86年)によると、大学には「自動車学校型」「知

的コミュニケーション型」「予言共同体型」の三つがあるという。現代の大学は、この三つが薄められた形で存在していることを感じる。資格試験や採用試験に向けての知識・技術の習得(自動車学校型)、ゼミや演習の必修化(知的コミュニケーション型)、主体的関与や行動を推奨するアクティブ・ラーニング(予言共同体型)。

さらに、デジタル環境の影響(スマホとゲームの世界への耽溺)と社会的貧困からくるアルバイト生活が加わる。これらをバランスよく配置し、大学生活を送ることが、今の大学生に求められている。大学生活満足度は年々上昇しているが、学生の批判精神が薄れていることが気掛かりである。

